

クラッシュ・ブレイズ  
追憶のカレン

茅田砂胡  
*Sunako Kayata*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

DTP 挿口  
P 画 絵  
ハンズ・ミケ 鈴木理華

## 1

シエラは元来、口数の多いほうではない。

無口というには語弊があるし、仲のいい人たちと会話を楽しむこともちゃんと知っているが、自分に関する事柄は必要以上には語らないのだ。

それが昔からの癖で、彼の性分でもある。

ただし、同時に物事をきちんと片づけておくのも彼の性分のはずだから、金曜の夜、夕食の席で突然、週末はセントラルで過ごしますからと言われた時は、リイも思わず問い返した。

「ずいぶん急だな？」

「ええ。本当はお断りするつもりだったんですけど、費用は学校持ちでレポートを書けばいいんだからと、熱心に誘われてしまいました……」

シエラの口調に言い訳がましいところはないが、押し切られたのは確かなようで苦笑している。

「手芸部の人たちに頼まれてお手伝いをした作品があるんですが、それが今度、セントラルの展示会に出品されたそうなんです」

「手芸の展示会？ 中学生のか？」

「いえ、高校生の部もあるようですよ」

どっちにせよ、生徒の作品展には違いはない。

「連邦大学じゃなくてセントラルでやるのか？」

「ここでも事前にやったそうなんです。そうしたら、その作品が北部地区からの出品作の一つに選ばれて、国際学生展示会といったと思います。あらためてセントラルに送られたらしいんです」

説明しているシエラもよくわかっていない口調だ。

正面に座っていたジェームスが口を挟む。

「それならシエラが行くのは当然だろう。制作者が展示品を見に行かないなんてありえないよ」

「制作出品者はアイクライン中等部の手芸部だよ。」

わたしは最後のほうで参加しただけなんだから」

シエラの言い分は実際にはちよつと違う。

そもそも手芸部の女の子たちに頼まれて、図案を譲つてやったのがシエラである。

シエラにとつて針糸とは物心ついた時から身近にあるものだった。衣服は自分でつくるのが当たり前、糸も布地も自分で縫り、織るものだった。

長年身に付いた習慣は捨てがたいもので、機械が自動的に衣服をつくってくれる世界に来てからも、シエラは好んで針糸を使つていた。

その特技は意外なところで需要があつたのである。何でも既製で揃う便利な世の中だからだろうか、手芸は趣味の一環、もしくは自己表現の芸術として立派に存続している。

出来映えによつては高い評価を受けるらしい。

そんなわけで、シエラが手芸好きの女の子たちと親しくなるのはごく自然な成り行きだった。

正式に入学しているわけではないが、彼女たちに

招かれて時々部屋に顔を出す程度には仲がいい。

ある時、シエラが試みに描いた図案を彼女たちがすっかり気に入つて、使わせてほしいと頼んだのだ。

シエラは快く承知して、あらためて詳しい図案を描いたが、完成までの期限を聞いて心配になった。

かなり難易度の高い作品だったからである。

「具体的にどんな作品なんだ？」

「現代キルトのベッドカバーです。かなりの大物で、しかも出品の条件が完全手縫いだというんですから、しまったと思ひましたよ」

シエラはため息を吐いている。

「まさか機械が使えないとは思わなくて。先にその条件を聞いていれば、別のものを描いたんですけど……みんな本当によく頑張つたと思います」

彼女たちは四人がかりで休日返上で取り組んだが、どうしても出品期限には間に合いそうにない。

最後の手段としてシエラに泣きついたのである。

必死のラストパートのおかげでキルトは完成し、

めでたくセントラルでお披露目ひろめとなったのだから、彼女たちがシエラを誘うのは当然だった。

ジェームスが羨ましいうらやのとからかい半分の様子で身を乗り出した。

「なあ、その中に可愛い子いる？」

シエラは笑って答えた。

「みんなとても可愛い人だと思うけど、残念ながら、わたしは彼女たちに男と思われていないらしいよ。

——日曜には戻ります」

「ああ」

リイが頷うなずいた。あつさりしたやり取りだったが、

ジェームスが不思議そうな顔になる。

「ヴィッキーは留守番なのか？」

ジェームスの知る限り、この二人が丸一日以上、別行動をするのは極めて珍しい。

リイは肩をすくめた。

「手芸の展示会だぞ。おれが行っても意味ないよ」  
もつともだとジェームスも頷いたが、今度は別の

ことが気になったようで、シエラに眼を移した。

「ずっと女の子と一緒にさ、疲れないか？」

「わたしはそのほうが楽だけどね」

これはシエラの本心だった。

男の子の突拍子もない行動や限度を超した悪戯いたずらにつきあわされるよりは、女の子と一緒にいるほうが自然体でいられるし、くつろげるのである。

土曜の朝一番の定期便で、一行は出発した。

女の子たちはすっかり興奮気味で、おしゃべりに夢中だった。セントラルで開かれる展示会はよほど特別なことらしい。

シエラはもっぱら聞き役に徹し、快く彼女たちのおしゃべりにつきあっていた。

女の子にしてみればこんな男子は貴重である。

シエラもシエラなりに小旅行を楽しんでいたが、展示会の会場に着いた時は驚いた。

連邦国際フォーラムは普段は企業関係の展示会や新作発表会などを主に開催している場所である。

エボン島でも十指に入る大規模な展示場だ。

中高生の作品展示会ということで、体育館程度の大きさを想像していたのだが、とんでもなかった。

建物の内部は無数の仕切りに区切られ、真ん中にまっすぐ伸びた通路が設置されている。

その通路に立つと建物の端から端まで見渡せるが、突き当たりがまるで地平線のように遠く感じる。

部長のパーティが茫然と眩いた。

「迷子になりそう……」

シエラもまったく同感だった。

展示概要がいちやうによると、この展示会に参加した学校は五百七十四校、展示品の数は一万点に上るといふ。

これほどの規模とは予想もしていなかった。

観客の数も相当なものだったが、会場が広いので混み合っている感じはしない。

地元の人や関係者の大人の姿もちらほら見えるが、圧倒的に多いのは中高生だった。

意外にも男子の姿が多い。

女子との比率はほぼ半々だ。

出品されたのが手芸作品だけなら、恐らくこうはならなかったはずである。

ざつと眼に入るだけでも、木工細工、硝子工芸がらす、七宝しっぽう、彫金ちようきんなどが並んでいる。

特に入口近くに展示された木工の椅子の一揃いは高校生がつくったとは思えない見事な出来映えで、アイクライン手芸部一同は呆気にとられていた。

シエラも、これならリイを誘ってもよかったなと思ったが、手芸部の少女たちは我に返ると真つ先に自分たちの作品を見に行つた。

会場のあちこちで控えめな歓声があがっている。

連邦各地からやってきたと思われる生徒たちが、展示された自分の作品を眺めてはしゃいでいるのだ。

もちろん、アイクライン中等部手芸部もその例に漏れなかった。

彼女たちの名前で出品した現代キルトは大きさもさることながら、その図案は超絶技巧を極めている。

煌びやかな万華鏡を覗き込んだようにも、まるで絨毯のようにも見える。中央に大きなメダリオン、そこから放射状に紋様が広がって、周囲には複雑な蔓草紋様が配置されている。

こうして大きく広げられて壁に掛かっていると、うぬぼれではなく人目を引く出来映えだった。

パティがシエラを振り返り、笑顔で礼を言った。

「ほんとにありがとう。シエラがいなかったら絶対、間に合わなかった」

「とんでもない。わたしは最後を少しお手伝いしただけです」

他の三人の少女たちが口々に反論する。

「またそんなこと言う。謙遜しすぎだよ」

「そうよ。本当に助かったんだから」

「いつそ正式に入部しない？ シエラならいつでも歓迎するから」

背の高いキャロル、ちよつと控えめなブリジット、おしゃべりなエマという顔ぶれである。

キャロルは痩せ形で色が黒く、赤毛のエマは中肉中背、ブリジットは色白で大きな青い眼をしている。黒髪のパティは手芸の他に運動も好きなので、よく発達した筋肉質の体つきである。

みんな三年生で、シエラだけが一年生だ。

展示作品は完全手作業の部門と機械使いの部門に分かれている。手作業の部にはレースのシヨールや敷物があり、色鮮やかな縫い取りがあり、少しずつ色を染め変えた何種類もの手染めのストールがあり、もちろんアイクラインと同じ現代キルトもあった。

手芸部の少女たちはみんな密かなライバル意識を燃やして、それらを自分たちの作品と見比べた。

決して自意識過剰ではなく自分たちのキルトはかなり出来がいいという結論に達したが、さすがに大きな声では言わない。周りにいるのは自分たちと同じ中高生の出品者ばかりだからだ。

機械使いの部で目立ったのは織物だった。

群衆を描いた巨大な絵画のような織物が圧倒的な

存在感を主張しており、説明書きを読むと二十人の高校生が一年がかりで仕上げたとある。

さっきの椅子もそうだが、くろうとはだし 玄人跣の出来映えで、シエラも思わず感心した。

「これなら立派に売りものになりますよ」

エマが笑った。

「買えないわよ。ここの展示品は全部非売品だもん。

おみやげ用に出品されたのなら買えると思うけど、行ってみる？」

「荷物になるから後にしなよ」

パティが言ったが、興味があるのはみんな一緒だ。

ちよつと覗くだけと言いつつ、彼女たちの足は販売品を扱っている一角に向かった。

七宝の装飾品や革細工の財布、ビーズの置物など、可愛らしい小物がずらりと並んでいる。展示品ほど凝ってはいないが、充分売りものになる出来だ。

売り上げは慈善事業に寄付されるという。

パッチワークに刺繡ししゅうの施された小物袋を取り、

つくづく眺めながらシエラは訊きいた。

「こちらの部門には出品されなかったんですか？」

少女たちはちよつと残念そうに答えた。

「本当は出したかったんだけどね」

「時間がなかったのよ」

「わあ、すてき。このグラス……」

「こっちのブローチも可愛い」

反省する傍そばから品物に夢中になっている。

キャロルが叫んだ。

「ね、あれ見て！」

展示会場に隣接して物産展が開かれている。

各地の有名な手工芸品を取り扱った物産展とかで、かなりの賑にぎわわいだだった。

こちらは明らかに大人の姿が多いが、少女たちも負けじとばかりに眼の色を変えて突進した。

「ウルグラードの銀蚕ぎんさん！ 本物見るの初めて！」

「すごい！ エグベスの切り抜き刺繡のハンカチ！

いいなあ……」



布一枚にとんでもない値段が付いている。

とても手を拭くことなどできそうにない。それはまさしく小さな四角い芸術品だった。

大人でも二の足を踏むお値段だから、彼女たちはうっとり眺めるしかないが、品物の中には中学生のお小遣いでも手が届くものもあった。

地方独自の紋様を織り込んだ生地、何色あるのか数えられないほど多彩で光沢のある刺繍糸、まるで寶石のようなビーズ、多彩な端切れに綿、革など。

こうした手工芸の材料には中高生が熱心に群がり、手芸好きな大人たちも混ざっている。

その中でも毛糸売り場は圧巻だった。

手芸部の彼女たちには編み物の心得もある。特にブリジットは得意だ。毛糸にも詳しいつもりだが、ここに並んでいるのは一般的な綿糸や絹糸にしても聞いたことのない製造者がほとんどだった。初めて名前を聞く獣毛もあった。意匠糸ファンシージャーンと呼ばれる飾り糸にしても見たこともないようなものばかりだ。

その一角に好みの細い糸を何種類か繕り合わせて、オリジナルの毛糸を巻いてくれるという区画コーナーがあり、シエラは興味を引かれた様子で足を止めた。

同じように熱心に毛糸を眺めていたブリジットが、ちよつと驚いた顔で尋ねてくる。

「シエラって編み物もするの？」

「ええ。レースならよく編みますよ。衣類はあまりやったことはありませんが……」

その売り場には完成見本としてセーターやボタン付きのニットの上着などが展示されている。

中でも複雑な編み目のセーターに心を引かれて、シエラは売り場の女性に尋ねてみた。

「これの編み方は教えていただけませんか？」

女性は笑って商品の一つである記録媒体を示した。寮の端末で容易に読み取れる型式である。

「こちらに詳しく載ってます。レースが編めるなら、大丈夫ですよ」

ブリジットも身を乗り出して、毛糸とデザインを

見比べている。毛糸を選ぶ前に、まず何を編むかを決めなくてはならないからだ。

「——何にしようかな。ケープかベスト、ちよつと

面倒だけどボレロに挑戦してみようかな」

「いいですね。きつとよくお似合いですよ」

ブリジットは色白でぽつちやりした少女だから、

可愛らしいパステルカラーがよく似合う。

悩んだ末、ボレロに決めたらしい。

毛糸の山と真剣に睨めっこした後、ブリジットは

ふわふわのピンクの糸と薄い緑の糸、きらきらした

白の糸を選んで巻いてもらうことにした。

一方、シエラはもつと太い秋冬用の、まつすぐな

毛糸をいくつか選んだ。

セーターを編むなら太めの糸にするのは当然だが、

シエラが選んだのは少しずつ色の違う赤が三種類と、

白に近い灰色にうつすらと銀の入った飾り糸だった。

これを巻いたらかなり派手な毛糸ができあがる。

編み方次第だが、この糸から出来上がる完成品も

しかるべく華やかになるはずだ。

月の光のような少年には何だか不似合いに見えて、キヤロルが不思議そうに尋ねた。

「シエラ。それ、自分の？」

「いいえ、リイにです。似合いそうでしょう？」

ブリジットは眼を丸くし、エマは吹き出した。

パティも笑いながら首を捻っている。

「着てくれるかなあ？ 男の友達が編んだ手編みの

セーターなんて、男の子はいやがるんじゃない？」

「あの人は着るものを選び好みはしません」

シエラは自信満々の笑顔で断言した。

「二度と手に入らないオリジナルの糸なんですから、

着せがいのある人に編まなくてはもつたいたない」

売り場の女性は二人の注文を書き留めて、親切な

口調で言った。

「巻き上げるのに多少のお時間が掛かりますので、

明日受け取りにいらっしやるか、でなければ郵送も

できますけど、どちらにします？」

二人とも明日取りに来ると答えた。

その後は本格的に展示品を見学し、夜は学校側が用意した宿舎に泊まった。この旅行はれっきとした課外活動なので、引率の教師も一緒である。

マデリン・アミエ女史は生活科を受け持つ講師で、三十五歳。きびきびした態度の有能な女性だった。

生徒にも単独行動は控えるように指導しているが、口やかましいのとは正反対で、むしろ最低限の規律——たとえば集合時間に遅れないこと——それさえ守れば、後は放任主義といってもいいくらいだった。自分の役目は生徒たちを縛りつけることではなく、慣れない土地で羽目を外しすぎないようにちよつと眼を配れば充分だと彼女は考えている。

そうした女史の方針を生徒たちも歓迎していた。

翌朝、一同は再び会場に向き、まずは畑違いの木芸品から見始めた。

手漉きの紙でつくったブックカバーを掛けた本。

両脇に置かれたブックエンドには木彫りの彫刻が

施されている。制作過程や制作日数も記されていて、みんな興味深く見学していた。

課外活動の一環である以上、学校に戻ったらこの展示会の報告書<sup>レポート</sup>を提出しなくてはならない。

それなら自分たちの関わった手芸部門だけを見学すればよさそうなのだが、彼女たちはごく自然に、それではつまらないと思っていた。

書かなければならないから書くのではない。

自分が何に興味を持ったか、何が新鮮だったか、何に驚いたか、何がおもしろくて興味を引かれたか。自分の眼で見て、判断して、自分が書きたいから書くのでなければ報告書<sup>レポート</sup>の意味がないのだ。

会場の広さも作品の種類も一日かかってもとて回りきれないくらいだから、退屈はしなかった。

気になるのはやはり歳の近い中学生の作品だった。高校生になると完全にお兄さんお姉さんの技術で、上手なのはわかるし、その出来映えに感心もするが、あまりピンと来ないのである。

この展示会に出品する条件は、第一にはもちろん生徒の手づくりであること。

第二に『実用品であること』だ。

だから、絵画や彫刻のような芸術作品はない。

硝子や彫金にしても単なる置物では出品不可だが、硝子はいくらでも形を変えられる。花瓶かびんや受け皿といった実用品にすることは簡単だ。

彫金にしても、鎖やピンをつけて装飾品にすれば出品できる。

物産展でも見かけた七宝の装飾品は特にきれいで、みんな興味津々しんしんに覗き込んでいた。

「すごいよねえ……」

「おみやげ用より格段に手が掛かってるよね」

陳列台にずらりと並べられた作品を眺めながら、横に移動していく。

その時、シエラは後ろから軽く押された。

同じように陳列台を見ながら歩いてきた女の子が、前のシエラに気づかずにつかつたのだ。

シエラはもちろん後ろの気配には気づいていたが、前にキヤロルがいて避けられなかったのである。

ぶつかった少女は慌あわてて謝ってきた。

「ごめんなさい」

「いいえ、お気になさらず」

その口調に女の子はびっくりした顔になった。

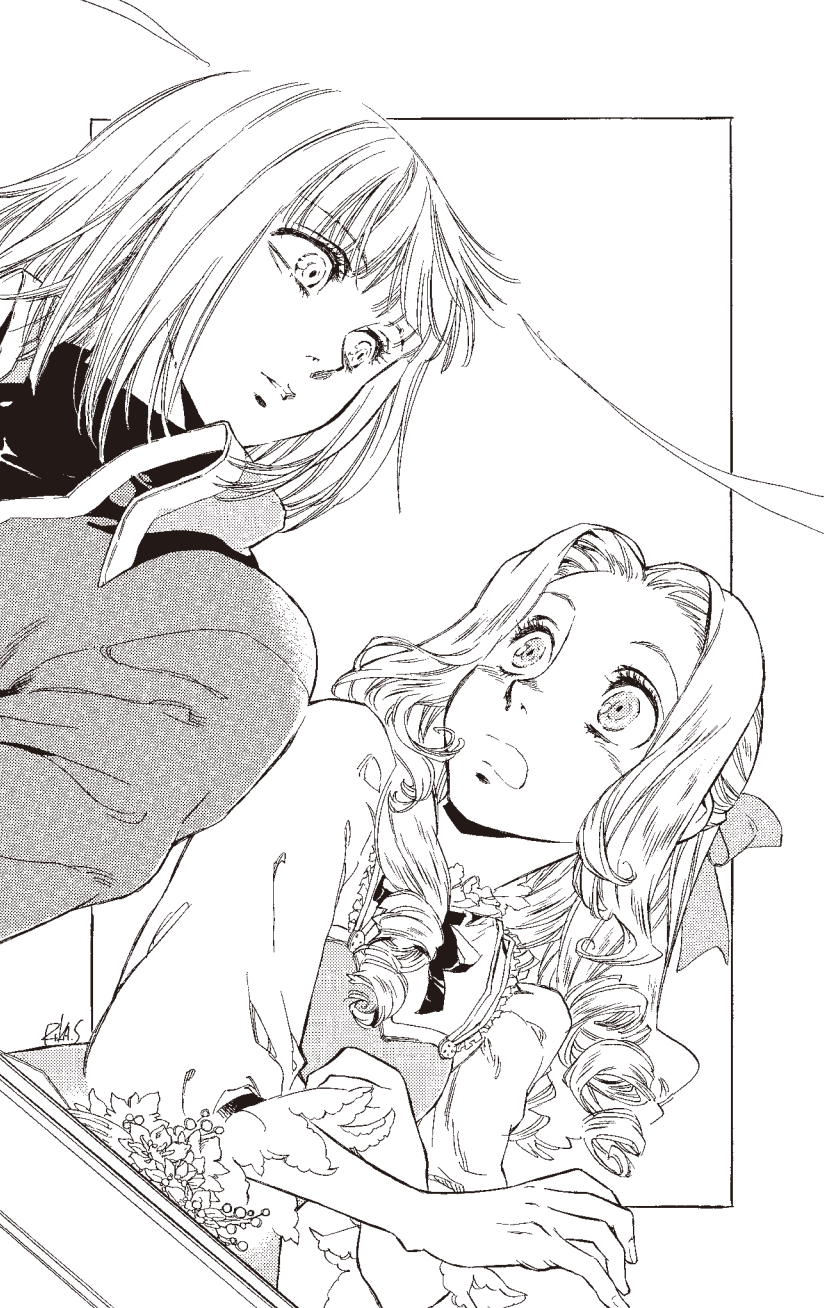
きれいに巻いて垂らした金髪の一部を結び上げて、大きな茶色の瞳ひとみをしている。色白で、ほっそりした体つきの可愛い少女だった。

手芸部の女の子たちと同じ年頃だろう。にっこり笑って頷くと、何か他に見たい展示品があったのか一同を追い越していった。

やがて昼時になり、シエラとブリジットは巻いてもらった毛糸の山を受け取って少し早い昼食にした。

生徒たちが大勢集まることを予想して、会場には即席の飲食店が開かれている。

一つの机を囲んでお昼を食べながらエマが訊いた。「午後は自由時間だけど、どうする？」



この『どうする?』はシエラに対する問いかけだ。自分の希望より先に他の人の意見を確かめるのがシエラの性分でもあるから、穏やかに微笑み返した。

「皆さんは?」

「買い物!」

即座に答えが返ってくる。

地元では手に入らない洋服や小物、化粧品などを扱う店がこの近くにあり、狙っていたのだという。

ただ、扱っているのは女の子のものばかりだから、さすがにシエラを誘うのはどうかと懸念けんねんしたらしい。

相手は一応、れっきとした少年なのだから。

「シエラを見てると時々忘れそうになるけどね」

パティが笑い、エマがからかうように言った。

「シエラも一緒にいいじゃないって言ったんだけど、ブリジットがいやだって」

「だって、下着も売ってるのよ!」

ブリジットが叫び、友達を非難する顔になった。

「みんなずるい。あたしのせいにするの?」

「ほんとのことじゃない。彼女の買い物につきあう男の子なんて珍しくないのにさ」

「それは買うものの種類によるでしょう!」

シエラは穏やかに割って入った。

「喧嘩けんかはやめてください。わたしも、ブリジットの意見が正しいと思いますよ。そういうことでしたら、

男の礼儀として遠慮させていただきます」

キャロルが真面目くさって言った。

「問題は、あたしたちの中であなたが一番女の子に見えるってことだよね」

みんな、どっと笑った。

シエラも笑ったが、ふと顔に視線を感じた。

誰が見ても美少女と思うに違いないシエラだから、見られることには慣れているが、ずいぶんと熱心な肌にとわりつくような視線である。

そっと周囲を確認してみると、さつきぶつかった女の子が近くのテーブルに座っていた。ほとんどの子が友達と賑やかに話しながら食事をしているのに、

その子だけは一人でぼつんと座っている。

シエラは顔を向いて女の子たちと話しながら、その子の様子を横目で観察していた。

どうしてもシエラが気になるようで、ちらちらとこちらを窺<sup>うかが</sup>っているのがわかる。

男の子だという話が聞こえ、銀髪に紫の瞳というシエラ的美貌<sup>びぼう</sup>が珍しくて眺めているのかと思つたが、それとはどうも様子が違う。決して自惚<sup>うぬぼ</sup>れではなく、シエラの美しさに一目でのぼせて迫ってくる少女も珍しくないのだが、それとも違う。

並々ならぬ熱心さであるのに、その割にシエラに興味があるとは思えない視線なのだ。

はてなと思ひながらシエラは何喰わぬ顔で食事を終え、みんなと一緒に席を立った。

すると、その少女も意を決したように立ちあがり、足早に近寄ってきたのである。

「あの……いいですか？」

「何でしょう？」

優しい口調に力を得たのか、巻き毛の少女は思い切った様子で続けた。

「今の話、聞こえちゃって。午後の予定がないって、本当ですか？」

パティたちも立ち止まって、何事かという表情で少女を見つめている。

しかし、少女が見ているのはシエラ一人だ。

「あたしもこれから自由時間なんです。よかつたら……つきあってくれませんか？」

「どこにですか？」

見当違いの質問のようだが、今回はこれで正解だ。少女は明らかにほっとした顔で言った。

「ブルグマンシア。——占いの館です」

シエラは紫の瞳を少し見開いた。

自分には縁もなければ興味もない最たる場所だが、女の子の好きそうなところであるのは知っている。

巻き毛の少女は真剣そのものだった。

「ずっと前から予約してやっと思ってもらえることに

なつたんです。友達と二人分。だけど友達が急用で来られなくなっちゃって……どうしようかと思つて。あたし一人じゃ行くのもちよつと。そうしたら今の話が聞こえたから。——だめですか?」

支離滅裂な言葉だが、少女は一生懸命だった。

女の子の中には一人ではどこにも行けないという種類の少女がいる。知らない場所ならなおさらだ。

この子もその一人らしいが、ここで騎士道精神を發揮する気はシエラにはなかった。

「せつかくですけど……」

やんわり微笑みながら断ろうとしたが、意外にも周りの女の子たちが大いに乗り気になったのだ。

「何言つてんのよ、もつたない」

「行つてきなよ、ブルグマンシアでしょ?」

「知つてるんですか?」

「知らないの!」

悲鳴のような声が返ってきた。

その顔つきからして、あらためてシエラは少年で、

男の子というものは普通、女の子ほど占いが好きなものではないと思ひ至つたらしい。

代表してエマが熱心に語るところによると、その占いの館は芸能人の間——特に中高生に人気の高い若手の俳優やモデルの間で絶大な信頼を得ており、他星系から占ってもらいに来る芸能人も多いという。占師の名前はタマラ・メサ。

頼めば一般人も占ってくれるが、なかなか予約が取れないことでも有名だという。それでもこの館を訪れる少女たちが後を絶たないのはタマラに人生の成功——特に芸能界での成功を保証してもらえれば決して外れないという『伝説』があるからだ。

シエラは小さなため息を吐いて、少女を見た。

「あなたは何になりたいんです?」

少女はちよつと躊躇ったが、小声で答えた。

「モデルです。『MANIERA』の」

情報通のエマがこれまた素早く、中高生の女子の間で大人気のファッション雑誌で、一流モデルへの



登竜門でもあるのだと説明してくれた。

シエラは再び嘆息して少女に眼を移した。

「予約したのは二人分なんですネ？」

「はい」

知らない相手に声を掛けるだけの勇氣があるなら、一人で初めての場所にも行けるだろうと思いつながら、シエラはあくまで断ろうとした。

「わたしは芸能界には興味がありませんが……」

巻き毛の少女は必死の顔つきで食い下がった。

「それだけじゃないんです。友達のこととか恋愛のこととか、これからの生き方のことなんかもすごく詳しく占ってくれるんですよ」

そんな助言はそもそもシエラには不要である。

「でも、占ってもらうからには見料が必要でしょう。

それほど持ち合わせがないんです」

エマとキャロルが口々に言った。

「だったら貸してあげる」

「そんなには掛からないはずだから」

エマもキャロルも少女がかわいそうに見えたのか、人氣の占いの館に興味があったのか（恐らく後者に違いないだろうが）熱心にシエラを促した。

「チャンスじゃない。行つてきなよ」

「そうよ。どんな様子だったか後で教えてよ」

そんな安直なと思つたが、名前も知らない少女はすがりつくような眼差しをシエラに向けている。

パーティまでがそつと囁いた。

「占いに興味なくてもさ、他の学校の子と知り合ういい機会なんじゃないの？」

彼女たちにとつてシエラは男のうちに入らない。

従つて、シエラが他の女の子と知り合える機会を

邪魔する気は毛頭ないらしい。

何より、パーティもエマもキャロルも、この少女を感じのいい子だと思つた。きれいな女の子なのに、不思議と同性の反感を買わない素直さがある。

ブリジットも同じ印象を受けたようので、シエラが持つている荷物に手を伸ばした。

「あたしたち一度宿舍に戻るから、預かってあげる。部屋に置いておくね」

セーター一着分の毛糸玉である。

それほど重くはないが、かさばる。

ここまで応援されてしまつては拒絶もままならず、

シエラは苦笑しながらブリジットに荷物を渡した。

念のためにエマとキャロルから少しお金を借りて、巻き毛の少女を振り返つた。

「それではご一緒しましょうか」

少女はぱあつと顔を輝かせた。どんな男でも悪い気はしないだろう。明るく魅力的な笑顔だった。

四人に対して嬉し<sup>うれ</sup>そうに笑つて頭を下げると、弾む<sup>はず</sup>ような足取りでシエラを案内して行つた。

少女たちも二人と別れて荷物を置きに宿舍に戻り、あらためてお目当ての店に向かつたが、その途中で、キャロルが思い出したように笑つた。

「あの二人、なんか、いいんじゃない？」

「あれくらい可愛い子ならお似合いだと思うけど、

シエラにもとうとう彼女ができるのかなあ？」

ブリジットがしみじみと言えばエマも苦笑して、「学校じゃ無理だもんね。あのきれいな子といつも

ぴつたりくつついてるんだもん」

もちろんリイのことである。

パティも嘆<sup>なげ</sup>かわしそうに頷いて同意を示した。

「あれじゃあ女の子は誰も近寄れないよね」

しかし、路線バスに乗り込む頃には、彼女たちはシエラのこととは忘れていた。自分たちも自由時間を満喫するのに忙しかったからだ。

目当ての店舗では商品を買うよりも眺めるほうが多かつたが、財布の中身と検討しながらキャロルは化粧品、エマは少し大胆な下着、パティは新しい靴、ブリジットは毛糸でお小遣いを使つてしまつたので、安い指輪一つにしたが、それでも充分に満足して、みんな意気揚々と宿舍に引き上げた。

その頃には集合時間ぎりぎりだったが、荷造りは既に済ませせてあるので慌てたりしない。

後はアミエ女史に引率されて宿舎を出るだけだが、時間になつても戻らない生徒が一人いた。

シエラである。

手芸部の女の子たちは思わず互いの顔を見合わせ、アミエ女史は小さく舌打ちした。

集合時間は午後四時だ。四時三十分になつたら、宿舎の前から宇宙港行きの高速バスが出る。

「単独行動は控えるように言つたはずよ。シエラはどこなの？」

「単独じゃありません」

他の学校の子と占いの館に行つたことをパーティが話すと、女史は軽く眉を上げた。

「どこにある店なの？」

少女たちはいっせいに囁いた。

「住所は非公開なんです」

「予約が取れたら——取れることは滅多にないけど、その時初めて教えてもらええる仕組みなんです」

「タマラのところには有名人が大勢来るから、その

人たちの安全を守るためにも仕方ないんです」

「でも、噂ではエボンにあるって——なんでかつて言うとき、モデルのメリザンドも歌手のアランチャもタマラに占つてもらう時はフラナガン島じゃなくてエボンの宙港に降りるからって有名な話で——」

エマの台詞を遮つて女史は言つた。

「連絡先はわかるのね。番号は？」

「でも、掛けても自動音声しか流れませんよ」

「実際に掛けてみたの？」

ここはセントラルで、彼女たちが普段住んでいる連邦大学とは別星系である。

中学生の恒星間通信には許可が必要だが、エマは慌てて、雑誌に書いてあつたのだと説明した。

女史はさつそくそこに掛けてみた。

聞こえてきたのは確かに自動音声だった。

お名前と住所、性別、年齢、占つてほしい内容をお話しくださいと一方的に告げるだけだ。

女史は事務的に名前を名乗り、連邦大学に属する

中学校の講師であると身分を明かし、うちの生徒がそちらに向いた後、連絡が取れなくなっているが、いつそちらを出たのか教えてもらいたい旨<sup>ね</sup>を告げ、自分の連絡先を言い添えて通話を切った。

そうこうしているうちにバスが来てしまった。

「仕方がないわね。あなたたちは先に戻りなさい」

このバスに乗らないと、席を取ってある定期便に間に合わなくなってしまう。

アミエ女史は同じ便で帰る予定の同僚に連絡し、事情を説明して、四人の引率を頼んだ。

少女たちも不安そうな顔だったが、残っているも仕方がない。みんなのろのろとバスに乗り込んだ。

戻ってこないシエラを意外に思ったのは確かだが、この段階では彼女たちはまだ誰も、事態をそれほど深刻には考えていなかった。

「どうしちゃったんだろうね？」

「占ってもらうのに時間が掛かったとか」

「もしかしたら、迷子になってるのかもよ」

「シエラが？」

パティのこの一言でみんな押し黙ってしまった。

「子どもじゃあるまいし。集合時間に遅れるなんて、シエラらしくない。何かあったんだよ、きっと」

パティは顔をしかめながらもきっぱりと言った。

アミエ女史もその意見に賛成だった。

あの少年は他の少女たちより二学年も年下だが、一番しつかりしていると女史は密かに評価していた。

こんなことは極めてあの少年らしくない。

少女たちを乗せたバスを見送ると、アミエ女史は迷わず警察に通報した。

中学生の少年が行方不明と聞いて、地元の警察はすぐにやって来た。まだ若い警官はアミエ女史から丁寧<sup>ていねい</sup>に事情を聞き取ってはくれたが、その際、念を押すように言うのは忘れなかった。

「少年は集合時間に遅れているだけなんですわね？」

捜索願を出すにはいくら何でも早すぎるだろうと、拍子抜けと軽い非難の響きのある口調だった。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。